

令和2年2月3日

京口門だより No. 76

こよみの上では春になろうというのに、今年は新型コロナウイルス感染で戦々恐々とした世情です。「又一つ病身(やまいみ)に添う春寒し」(松本たかし)

コロナウイルスというウイルスは、ふだんは晩秋から冬、初春にかけてかかる風邪の原因となる病原体です。コロナウイルスに感染すると人や動物に呼吸器症状や胃腸症状を起こすと言われていました。2003年(平成13年)に中国から発生したSARS(重症急性呼吸器症候群)もコロナウイルスが暴発して起ってきた感染症でした。

今回の新型感染症も中国から起ってきました。中国ではカモやブタあるいはその他の動物を食用にします。こうした動物の排泄物に多くのウイルスが含まれており、塵などにまじって動物や人に感染して、インフルエンザを含めた多くのウイルス感染症の引き金になります。実際、1918年(大正7年)のスペイン風邪といわれる大流行は4,000万人ほどの死者を出しましたが、中国から起って、ロシア西部、ヨーロッパに伝わったといわれています。

もっと古い紀元前の時代(後漢)に、中国では感染症の暴発が起きたことが、漢方の原典である傷寒論に記されています。著者といわれる張仲景の一族は二百ほどあったのが三分の一に減ったとあります。中国では古代から現代にいたるまで、次々と感染症の暴発がおこっており、漢方ではこれを瘟疫(おんえき)や広い意味の傷寒(しょうかん)と呼んで恐れました。そしてそれを克服しよう多くの治療薬が工夫されました。

隣国中国で起こることは日本にも当然影響してきます。わが国の平安時代(九世紀)には疫病として流行したことが記されています。当時はシワブキ(咳嗽)と呼ばれて恐れられました。増鏡(ますかがみ)という本には「元徳元年、ことしはいかなるにかシワブキヤミはやり(流行)て人多くう(亡)せ給う…」と記されています。咳嗽がひどく亡くなるということは、いまでいう肺炎を起こして多く亡くなったということでしょう。

現在の新型コロナウイルス感染症も、古い時代の中国やわが国で繰り返されてきた瘟疫といえます。あまり治療法がないと言われてますが、試みてはいませんが、漢方薬の柴胡剤は初期の段階では有効ではないかと思えます。ただ漢方薬は時期と症状をよく見きわめて使わなければうまく効果をあげることはできません。

